

駒沢大苫小牧高校の夏の大会での 57 連振りの連覇と言う快挙に、暗雲が漂っている。高校側の調査が近々に高野連に提出されて、厳しい裁定が出されるのだろう。然しながら、生徒が暴力を振るった某高校と違って、今回のケースでは生徒達には非はないと言う見方が強い。さもありなんだ。

さて、根源的な問題は、野球部の部長の行為が愛の鞭だったのか、それとも単なる暴力だったのかということだろう。

現下の日本は、暴力的行為は全て悪との強迫観念に捉われている。それらが過ぎて、最近では教師が生徒に注意することすらしない。チョークを投げつけることもない。子供達はそういう教師の弱腰を見越して傍若無人に振舞う。その悪循環に陥っているのが日本の教育現場ではなかろうか。

熱血教師の愛の鞭が暴力教師と世の非難に晒される。マスコミがそれを煽る。熱血教師の愛の鞭を受け入れられない生徒や親が騒ぎ始め、それに同調する輪が大きくなる。そして熱血教師は詰め腹を切らされて退職か左遷させられてしまう。その様な事例には事欠かない。熱血教師が少なくなってしまったようだ。

教師が怒りに任せて殴ったとすれば、それは確かに暴力行為だろうし、非難されるべきだろう。然し、殴る事が該生徒を指導する最後の手段であり、泣きながら振るう鉄拳は許されるべきだろう。勿論相手に与えるダメージの度合いも多くの方が許容できる限度以内である事が条件であり、過ぎたるは及ばざるが如しである。

殴られた生徒が、その事によって己の非を認める事が必要であり、それは日頃からの教師と生徒との良好な人間関係或いは信頼関係が醸成されているべきなのだ。

その様は関係など望むべくもないのだろうか。決してそうではない。

顧みれば、我々が幼かりし頃は、先生は絶対であり、先生も自信に満ちていた。決して生徒に迎合することもなかった。是は是と、非は非と明確に示して呉れ、生徒はそれを確かな人生の指針として受け入れた。

愛の鞭との美名の下に暴力を振るう事があるとすれば論外であるが、そういう事がある可能性があるからと言って、愛の鞭が全て悪であると断罪されていい筈はない。

殴られたことのない人間は殴られることの痛みが解らぬ。喧嘩を作法すら知らない。限度を遥かに超えてしまう。

何時の頃から、全ての暴力を否定し、愛の鞭を認めない風潮が生じたのだろうか。暴力は全て悪で非暴力は善、戦争は全て悪で平和は絶対善と言うような単純な二元論が蔓延している。単純な二元論は解り易く、受け容れられやすい。然し、その事が日本を可笑しくしているのではなかろうか。

先日、東京地裁で、所謂百人斬りに関する判決があった。既に歴史的事実としては、百人斬りなどと言うものは架空の話である事が認められているにも拘らず、「明白に虚偽であるとは認められない」との理由で原告の訴えを棄却した。在りもしない南京大虐殺の象徴的・中核的な出来事として今でも折に触れ、日本非難の材料とされ、日本自身もそれらが事実であったのかも知れないとの認識を持ち始めているようで、憂慮に堪えない。